



北海道がんセンターで  
がんと闘う白石さん



# 「がん治療」日本はここまで遅れていた!

## 反響続々! 告発キャンペーン 医療ジャーナリスト 伊藤隼也と本誌取材班



# 「抗がん剤と放射線治療」

# 専門医も薬も足りない!

### 外科医が抗がん剤治療を担当するのは先進国では日本だけだ...



福田衣里子議員(上)も一役買った 放射線治療装置



東京女子医大の  
三橋紀夫教授

有効な治療法が見つからず、病院から見放されてしまふ「がん難民」。〇七年に施行された「がん対策基本法」はそんな「がん難民」の解消を目指して制定されたはずだった。

前号では、国のがん医療の総司令部であるはずのがんセンター(現・国立がん研究センター)が、患者を追い返した実態をリポートした。しかし、日本のがん医療の遅れはそれだけではない。

「抗がん剤含む5種、治療せずに承認へ、別のがん転用可能」(朝日)

〈7医薬品の治療省略 ドラッグ・ラグ解消へ検討会〉(産経)

今年八月四日の各紙朝刊には、こんな見出しが躍った。厚生省内の有識者による検討会議で、五種類の薬品が治療を経ずに承認されるというものだった。

その一つ、抗がん剤の「ジェムザール」は卵巣がん患者が待ちわびていた薬だった。肺がん、すい臓がんなどの薬として承認されていたものの、発売から十年、海外では多くの国で承認されている卵巣がんに対しての保険適用が認められていなかったのだ。

この「ジェムザール」の国内での承認を求めて活動してきたのが、卵巣がん患者の会「スマイリー」代表の片木美穂さんである。

もう亡くなってしまった卵巣がんの女性が、片木さんに泣きながら訴えてきたことがある。

「病院で肺がんのおじさんが、『ああジェムザールか、これ白血球下がって身体がだるくなるんだよね。いやだな』と言いながら点滴を受けている。その隣のベッドで私は治療方法がなくて、効果の少ない、まじないみたいな薬を打っている。そのおじさんの点滴を抜いて私に刺したら犯罪

進行したがんは手術だけでは治らない。術後の再発、転移に対する抗がん剤と放射線治療も重要だ。ところが日本では、専門医の育成

片木さんの抗がん剤の承認を求める最初の戦いは、「ドキシル」だった。

〇六年九月に「ドキシル」の承認を求めて患者会を立ち上げた。世界で広く使われていた「ドキシル」が承認されていないのは、日本の他にモンゴル、北朝鮮、アフリカ諸国だけだった。活動のきっかけとなった、ドキシルを必要としていた片木さんの友人は設立の二週間後に亡くなった。

片木さんは、再発の不安を抱え、睡眠三時間の生活を半年続けるなかで、議員や新聞記者への売り込み方を学んでいく。署名活動では、薬害肝炎訴訟で有名になっていった福田衣里子氏(現代議士)の協力も取り付けた。約十五万五千筆を集めた。厚生省に「ドキシル」の承認を約束させた。活動開始から承認まで、二年半がかかっていた。

今回の「ジェムザール」の承認を受けても、片木さんの承認を受けても、

んは満足する様子はない。「保険の適用までは時間がかかるかと思っていました。足立信也政務官(当時)が記者会見で、『保険を付けます』と聞いて、八月には前倒しで保険が適用されるようになりました。それは政治主導だと感激したんです。

でも言ってみれば、私みたいにギヤギヤうるさい人に応急手当しただけで、本気で解決する制度づくりをしていない。にもかかわらず、多くのメディア

が「ドラッグ・ラグ解消へ」と打っちゃったのはすごく悲しかった。まだまだドラッグ・ラグの薬がたくさんありますから」

「ドラッグ・ラグ」とは、海外で新薬が発売されてから、国内で発売されるまでの遅れを意味する。厚生省によれば、平成十六年度の米国のラグは三十か月。これを平成二十三年度にはゼロにするというが、平成二十年度も二十八か月だ。「ドラッグ・ラグ」の問題には二種類あり、一つは海

抗がん剤治療は「綱渡り」

札幌に住む三十代の女性・白石えりさん(仮名、38)は末期の乳がん患者である。

〇七年の春、進行性の乳がん(Ⅱ期)と診断された白石さんは抗がん剤による治療を続けている。

自身の闘病をつづったブログは二百五十万アクセスを記録するほど反響を呼び、昨年からは『月刊宝島』で連載を持つなど、自身の病状を積極的に発信している。

白石さんの担当医である

が遅れ、しかも深刻なドラッグ・ラグが常態化しているという。世界標準から遅れる日本のがん治療を告発するキャンペーン第二弾。

外で承認されている薬が、国内で承認されるまでにタイムラグが生まれる「未承認薬」。もう一つは国内で承認された「効能・効果」以外の疾患に対して承認されるまでのラグの「適応外薬」である。

いずれにせよ、抗がん剤によって命をつないでいるがん患者にとって、「ドラッグ・ラグ」はそのまま「死」を意味する。

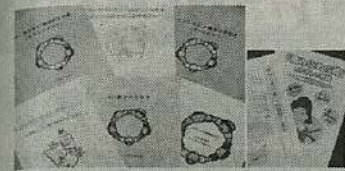
北海道がんセンター・渡邊健一医師(乳癌外科)が治療の経緯を説明する。

「術前の化学療法を経て、〇七年十一月に右乳房の全摘出手術を行いました。術後は再発を防ぐための放射線治療を行いました。しかし〇八年七月には鎖骨の上のリンパ節に転移が見られました。

手術の八か月後には再発して、さらに心タンポナーデ(心臓の周りの心膜に水が



抗がん剤も多様化しているが… (がん研究センターHP)



薬剤治療パンフレット

ら、今、この世にいないと思... 網渡りですよ。 どうやって上手に綱を渡っ...

外科だけでない治療の三本柱

「来年、承認されるのでは... と言われている『タルセバ』... 自由診療だとい...

の薬はトリプルネガティブ... の乳がんの人にも効くこと... がある。それは欧米の成績...

放射線のほうが良い分野も

「日本のがん医療は、ずつ... と外科医がインシアチブを... 取ってやってきました。患...

つかえる彼女。二年前、夫... と一緒に行った香港に、で... きるならもう一度遊びに行...

としてドラッグ・ラグを議... 論する場がないことなんで... す。結局、医師や患者個人...

がんが再発・転移し、亡くな

がんは手術で治す... わ... れわれ日本人にとっては、... 半ば常識のように語られて...

近畿大学医学部腫瘍内科... の西條長宏教授が説明する... 「例えば固形がん(血液以...

検査によって、根治可能

検査によって、根治可能... な早期発見に努めるのはも... ちろんだが、再発した後は...

とが目標となる。 外科手術はあくまでもが... ん治療の入口に過ぎず、そ... の後の治療が重要だとい...

名増えれば、大きなパワー... にはなっていくと思えます... が... (前出・西條教授)

どこでも質の高いがん医... 療を受けられる「均てん化」... である。

書にも書いてある。しかし... 欧米などではI、II期だっ... て放射線がやっています...

前立腺がん、子宮頸がん... などで、放射線治療が良い成... 績を上げている。